

ハイサイ
沖縄

沖縄と民芸

(一) 柳宗悦の民藝発見

■今号から五回にわたり、「沖縄と民藝」と題して、東京大学名誉教授で、沖縄県南城市にある「金城次郎館」館長の松井健（まついたけし）氏に寄稿いただいた。

「民藝」という語は一九二五年、今からちょうど百年前に、柳宗悦と河井寛次郎、濱田庄司の三人によって造語された。当然のことであるが「民藝」が新造語であるということ、その意味する内容もまったく新しく発見されたものであった。柳宗悦らが新たに美しいと感じた品物は、それまで美術品として認識されていなかったのである。高価で希少で鑑賞装飾されるものではなく、実用の新古の工芸品のなかに新しく美しいものを発見して、それらをまとめて「民藝」と名づけたのであった。これまでだれも美しいと気づかず、評価することもなかったものが、実は本当に美しいのだという主張を、柳宗悦は説明する必要性に迫られる。

この新語を造った直後、柳は「下手（げて）もの美」（一九二六年）と『工藝の道』第一章「工藝の美」（一九二七年）の二編の論考をこのために書いている。興味深いのは「民藝」を造語して一、二年後では、この語が広く知られていないので、「下手もの」「工藝」という二つの単語で代替していることである。「下手もの」という語が「民藝」に戻されるのは一九四二年、「民藝」造語から十七年後のことであった。

これら二編の論考を精読すると、柳宗悦は民藝の品が美しいのは、宗教的な機序（メカニズム）のもとに世に生まれ出たからだと考えていたことがわかる。値も安い、民具雑器として実用されたものがかえって美しいのは「無心の帰依から信仰が出てくるように、自ずから器に美が湧いてくるのだ」と考えたのである。

職人なら普通につくることができだれもが日用に使うことのできる品が「美の浄土に受け取られるとは驚くべきこの世の神秘ではないか」と柳は讚嘆する。この柳の説明は若い時から宗教の「究竟の世界に最も強く」ひかれ

てきた宗教哲学者としての独自のものだといえる。美しい民藝の品物は「味気なき日々の生活」をおくる人を救う「現世の園生（そのう）に咲く神から贈られた草花」であり、眼前の美の浄土とみなされているのである。

柳宗悦の民藝は食器やインテリアをきれいに整える趣味や嗜好などではない。民藝などの美しい具体的なもの直覚して強く感動することは、美しいものを介して宗教の最も深く親しい究竟の世界を味識する「味わい識る」ことにほかならないというのである。



美しい「下手もの」として例示されている馬の目皿（江戸時代）。直径三十三センチメートル（著者所蔵）

ハイサイ沖繩

【二〇二五年

除夜の鐘・修正会】

沖繩別院にて二〇二五年十二月三十一日に歳末の鐘撞きがあり、そのまま年をまたいで修正会が勤められた。小さな子ども達にも鐘を撞いてほしく、別途十九時から執り行いました。雨が降る足元の悪い中、多くの方が来院されました。その鐘には「國豊民安 兵我無用」の文字が刻まれている。その鐘の上空を毎日、戦闘機が飛びかう現実の中、願いの狭間を生

【沖繩の「桜」】

沖繩県名護市に工場を置くビールメーカー「オリオンビール」。最近では若者の観光客が社名のロゴの入ったTシャツを着て県内各地を観光する姿がみられる。そのオリオンビールから毎年冬に『いちばん桜』という商品が発売され、定番になっていく。何故、「冬に桜」なのか。

きることを考えさせられた。

修正会は来院された方々の対応や出仕を沖繩別院所属の僧侶で勤め、年越しを多くの方とともに迎えることができた。本堂の前に集まって会話をし、笑い声の響く温かい時間をすごしていただいた。参拝した一人ひとりの一年は様々な出来事があり、色々な想いをされたことでしょう。その一年の終わりに鐘の音、皆で勤めた声明の音が「正覚大音 響流十

が、沖繩の寒緋桜（かんぴぎくら）は一月の中旬から下旬にかけて濃いピンクの花が咲きはじめ、二月中旬に満開をむかえる。

また県内各地の桜並木のある場所で「さくらまつり」が開催され、毎年賑わいを見せている。

沖繩と言えれば夏のイメージが強いが、冬の沖繩も国内で一番早い桜を見る事ができるという魅力がある。ちなみに「桜前線」は、南から北に咲いていくのだが、沖

方」となることを願う一日でした。



除夜の鐘、別院の屋上にあるため、屋根が低くなっている。



繩の桜は北から南に咲いていくという一風変わったものである。

桜並木。五分咲きほど（本部町）



夜空に映える桜（八重瀬町）



「沖繩のナンカナンカ」

西田 和正

この「ハイサイ沖繩」でも度々触れているが、ここ沖繩は明治に入るまで「琉球国」という独立国家であり、薩摩藩の影響もあつて、浄土真宗は禁制であつた。しかし王府は真言宗・臨済宗を庇護しており、王家、士族を中心に仏教の影響を受けていた。また、日本におけるいわゆる「檀家制度」も江戸時代にできたものであり、琉球国であつた沖繩は現在でも「我が家の宗派」というものがない。

このような背景の中、沖繩の仏教の儀式や文化は現在、「沖繩式」という独自のかたちで人々の間に浸透している。例えば「スーコー（焼香）」といえは法事全般を指したり、地域にもよるが、七日ごとの中陰も「ナンカナンカ」といわれ、それぞれハチナンカ（初七日）フタナンカ（二七日）ミナンカ（三七日）ユナンカ（四七日）イチナンカ（五七日）ムナンカ（六七日）シンジュウクニチ（四十九日）という。

それでも、全国的な中陰や年季法要の「略式・繰上」等の風潮は、ここ十数年で沖繩にも影響が出てきており、「沖繩式」も変化してきている。

儀式のかたちは、各宗派や地域によってそれぞれあるが、故人をおもひ、皆で集まり、生前の思い出などを語り合い、それぞれの悲しみへの向き合い方をおして、自身のこれから見つめていけるような、大切な「場」は失われてはならないと思う。